

1 もくぞうによいりんかんのんざぞう 木造如意輪観音坐像 1 軀 [有形文化財（彫刻）]

[所在地] 桜井市多武峰 319

[所有者] 談山神社

[法 量] 像高 48.0 cm

[時 代] 鎌倉時代

[概 要]

多武峰談山神社に伝来した像高約1尺半の如意輪観音坐像で、旧妙楽寺の子院のひとつに伝わり、現在は境内東側に建てられた観音堂に秘仏として安置されている。その姿は、儀軌に則った六臂を具える如意輪観音である。多臂で動きのある姿勢ながら正面観・側面観ともに均整がとれ、生彩に富んだ容貌から、鎌倉時代前半頃の制作と考えられる。頭髪の緻密な毛筋彫りや、美しく流れる衣文の処理等に見事な彫技が認められる。カヤとみられる針葉樹1材を用いて頭部と体幹部を彫刻し、現状、肉身部が少し黒ずんでみえるが、表面全体に薄く着彩を施して檀木だんぼくの質感を意図した仕上げがなされている。

建久8年(1197)撰述の『多武峰略記』によれば、かつて妙楽寺の如法堂には、多武峰開基じょうえの定慧が唐から持ち帰ったという三尺(座高にして1尺半)の白檀製如意輪観音坐像が安置されていたといい、本像の制作や来歴との関係性も一考に値する。

本像は、奈良県内における鎌倉時代彫刻の優品のひとつに数えられ、その出来映えが高く評価されるとともに、廃仏毀釈を免れて今日の談山神社に伝存する中世以前の仏教彫刻のほぼ唯一の例であり、貴重な遺品に位置づけられる。

